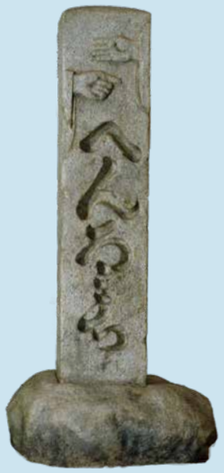
4　世界遺産登録に向けて

21世紀になると、四国遍路を世界遺産に登録しようとする運動が活発化します。四国4県は登録に向けて様々な活動を行うとともに、その文化的歴史的な特質を炙り出し、遍路文化を物語化していきました。また、今回の展示共催となる愛媛大学四国遍路・世界の巡礼研究センターと愛媛県歴史文化博物館による最新の研究成果の紹介も行います。

四国遍路文化の普及事業
四国４県等で構成される四国遍路世界遺産登録推進協議会は世界遺産登録推進のために各種の広報普及事業を実施している。2021(令和３)年11月には愛媛県松山市内で「まちから伝える・つなげる・四国遍路講座」が開催され、四国遍路の歴史文化の研究成果や、住民による活動事例が報告された。

愛媛大学による遍路資料の調査
愛媛大学法文学部日本史研究室では、世界遺産としての普遍的価値を証明するために四国遍路に関する調査を実施している。2015(平成27)年度からは愛媛県歴史文化博物館所蔵の俵札(愛媛県八幡浜市若山)の整理を進めている。この俵札はお接待の返礼として受け取った遍路の納札等を俵に詰めて軒下に吊るされていたものである。



馬木遍路道道標 複製　1863(文久3)年
国立歴史民俗博物館蔵　原品：松山市馬木町
原品は、松山市馬木町にて現存。四国道後平野の馬木村(愛媛県松山市)に幕末の文久3年に建てられた。この道標は同村32人の寄進になったもので、近世に数多くみられた巡礼への喜捨の一形態を示している。

英語版四国88ヶ所巡礼ガイド　2023(令和5)年　個人蔵
英語版による四国遍路のガイドである。地図を参照しつつ、宿泊先や移動手段、公共施設などについても細かく紹介している。

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国立歴史民俗博物館
National Museum of Japanese History
〒285-8502 千葉県佐倉市城内町117番地
お問い合わせは　ハローダイヤル 050-5541-8600
れきはくホームページ https://www.rekihaku.ac.jp

共催
愛媛県歴史文化博物館
MUSEUM of EHIME HISTORY and CULTURE
https://www.i-rekihaku.jp

愛媛大学 四国遍路・世界の巡礼研究センター
Research Center for the Shikoku Henro and Pilgrimages of the World
https://henro.ll.ehime-u.ac.jp

発行日：2023年9月26日

四国遍路・文化遺産
へのみちゆき

2023年9月26日(火)―2024年2月25日(日)

四国遍路は、四国4県を周回するルートの中に88ヶ所の霊場が設置された回遊型の巡礼路のことです。その起源は真言宗の宗祖、弘法大師空海によって定められたとされ、1000年以上にわたって人々に信仰され、継承されてきました。四国では、「お接待」という言葉に代表されるように遍路をもてなし、援助することで自らも功徳が得られると信じられてきました。もっとも四国遍路の長い歴史のなかでは、その位置づけや人々の関わり方も大きく変化してきました。現代では、国際的に知られるようになった四国遍路を、世界遺産に登録しようとする運動が活発化しています。

本特集展示では、四国遍路の歴史的文化的背景を概観しつつ、近現代における文化資源化の内実に迫っていきます。

1　四国遍路と弘法大師空海

四国遍路は、真言宗の宗祖、弘法大師空海が霊場を定めたと伝えられています。遍路の白衣にも「南無大師遍照金剛(なむだいしへんじょうこんごう)」と背中に記され、金剛杖(こんごうづえ)は弘法大師の化身であるとされています。本特集展示では、まず、弘法大師と四国とのつながりを示し、古代から続く大師信仰の系譜をみていきます。

弘法大師と衛門三郎の摺物　近代
愛媛県歴史文化博物館蔵
12番札所焼山寺の麓にある杖杉庵(徳島県神山町)が発行した摺物。摺物の上段には弘法大師と衛門三郎の伝承が記され、下段に衛門三郎が大師に許しを乞う場面が描かれている。

納め札　19世紀　愛媛県歴史文化博物館蔵
遍路は霊場をお参りした印として、本堂や大師堂に札を納める。17世紀末記された『四国遍路道指南』[1687(貞享4)]の中にも、遍路者の準備すべきものとして納め札が紹介されている。この頃からお堂に札を納めることを「札を打つ」と表現していた。

2　遍路絵図と描かれた遍路

次に江戸時代に確立し、庶民の旅の目的として普及していった88ヶ所霊場の特徴を概観します。四国遍路の長い歴史のなかでは、その位置づけや人々の関わり方も大きく変化しています。例えば、88ヶ所を巡る遍路ですが、これらの札所が定まったのは近世、17世紀に入ってからでした。札所をめぐる巡礼路が絞られていくのも、それ以後のことになります。四国遍路の普及に大きな役割を果たした媒体である絵図に注目し、描かれた遍路の姿についても紹介していきます。

細田周英「四国偏礼絵図」　1763（宝暦13）年
愛媛県歴史文化博物館蔵
現存する四国遍路絵図の中で最も古い木版の絵図。四国の南を上、北を下、東を左、西を右という構図で、本州から四国を眺めたような形に描かれている。四国88ケ所の札所と巡礼の道筋（遍路道）、城下、番所、国境、山坂峠、村里、名所船着、札所間の距離などが詳細に記載されている。絵図中央部には善通寺様式と呼ばれる弘法大師の御影を配置する。

象頭山参詣道紀州加田ヨリ讃岐廻并播磨名勝附
江戸時代後期
愛媛大学 四国遍路・世界の巡礼研究センター蔵
左下に「金毘羅美玉堂」とあることから、その門前町にある板元が、遍路や金毘羅への参詣客への土産として刊行した案内図と考えられる。瀬戸内海を渡って四国に上陸する旅人の目線を意識しているかのように、南が上の構図となっている。

四国遍路道中図　1940年代後半
愛媛大学 四国遍路・世界の巡礼研究センター蔵
四国を旧国名別に色付けをし、札所や本尊の略式御影、順拝の道筋、札所間の距離（里丁）、番外札所などが描かれている。また、鉄道の線路や船の航路など近代的な交通手段が地図上に示されているほか、郵便為替を用いて、遍路費用の受け取りができるように、札所近くの郵便局の所在が記されるなど、新しいスタイルの遍路が登場していたことがうかがえる。

四国霊場予州太山寺全図　1897（明治30）年
愛媛県歴史文化博物館蔵
四国霊場第52番札所の太山寺（愛媛県松山市）とその周辺を細密に描いた銅版絵図である。画面中央の広い境内には鎌倉時代に建立された雄大な規模をもつ本堂や二王門などの荘厳な伽藍の景観が描かれている。

3　近代化とツーリズム

近代化のなかで四国遍路は、全国からの集客を見込めるツーリズムへと展開していきます。遍路の代名詞でもある「南無大師遍照金剛」と背中に記された白装束についても、戦後になって定着した姿であることがわかってきました。大正時代に奉納された絵馬や戦前の絵葉書の遍路の一行には、白装束は数えるほどしかみられません。鉄道やバス、自家用車の利用なども盛んになることで、遍路の意味づけや参加者、規模や期間も変化していきました。

四国遍路絵馬 複製　1884（明治17）年　愛媛県歴史文化博物館蔵　原品：宇佐八幡神社
瀬戸内海に浮かぶ野忽那島（愛媛県松山市）の宇佐八幡神社には、明治前期の四国遍路絵馬が奉納されている。絵馬に描かれた遍路の姿は、現在のような白装束ではなく、縞や格子柄など普段の着物姿で、頭に菅笠を被り、首に「奉納四国中」と書かれた札挟みをかけている。

明治30年の遍路写真　1897（明治30）年
愛媛県歴史文化博物館蔵
愛媛県西予市宇和町山田にあった山田大師堂に奉納されていた明治時代の遍路の古写真。撮影場所は香川県琴平の福井写真館で、金毘羅参詣の記念として撮影され、帰郷後に山田大師堂に奉納されたものと考えられる。

昭和11年の遍路写真　1936（昭和11）年
愛媛県歴史文化博物館蔵
新居郡高津村（愛媛県新居浜市高津町）の白石トメ子（左・当時22歳）と伯母の酒井アサ（右）の女性２人が四国遍路の際に、西条の写真館にて70銭で撮影した遍路姿の記念写真。菅笠、金剛杖、札箱、さんや袋、手甲、脚絆、草鞋などを身に着けている。52日歩いて四国遍路を行った際に着用していた装束の一部は現在、愛媛県歴史文化博物館に保管されている。